

【実践報告】

ラーニングポートフォリオを用いた学修成果の分析 教養教育科目「自己省察と将来のキャリア設計」実践報告

塚本 明日香¹・今永 典秀¹・松林 康博¹
大宮 康一¹・廣内 大輔^{1,2}・加藤 直樹³・益川 浩一¹

¹ 岐阜大学地域協学センター

² 岐阜大学教育推進・学生支援機構

³ 岐阜大学教育学部附属学習協創開発研究センター

要旨

平成 28 年度に新しく開講した「自己省察と将来のキャリア設計」は岐阜大学地域協学センターで実施している次世代地域リーダー育成プログラム産業リーダーコースの初級段階科目である。5つの小問を設定し、小問内での内容は担当教員が共通の構成軸に則るように設計してオムニバスで実施した。「自己省察」をより深めるためにラーニングポートフォリオを活用することとし、学生に対しては小問ごとに全 5 回の記述を求めた。講義が完結した後、ラーニングポートフォリオに記された内容から学生が何を学び取ったのか、学修成果の分析を行っており、本実践報告では授業の内容と分析結果の両方を提示する。

キーワード：ラーニングポートフォリオ，COC+事業，次世代地域リーダー育成プログラム，キャリア教育

1. 授業の設計

次世代地域リーダー育成プログラム産業リーダーコース

本授業は岐阜大学次世代地域リーダー育成プログラム産業リーダーコース（以下産業リーダーコース）の初級段階に位置づくコース指定科目として開講した。産業リーダーコースは、岐阜大学が文部科学省事業「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」に採択されたことを受けて設計し、平成 28 年度から本格実施している教育プログラムである。

従前から、次世代地域リーダー育成プログラムは、「地域（岐阜）を知り」、「地域（岐阜）の課題を見つけ」、「地域（岐阜）の課題解決に向けて行動する」能力を備え、地域で実践的に活躍し、地域の中でリーダーシップを発揮できる人材ならびにリーダーを支援する人材の育成を目指して実施している。産業リーダーコースは特に産業界ニーズへの対応として

設計しており、インターンシップ等を通じて学生と企業の接点を強化し、地域産業の担い手としてリーダーシップを発揮し活躍できる人材の育成を目指している。

平成 28 年度の産業リーダーコース本格実施にあたって、初級段階のコース必修科目として開講されたのは、主に企業を知るための「地域産業と企業戦略入門-岐阜の起業を知る」、自分自身の志向を考えるための「自己省察と将来のキャリア設計」、実際に企業で活動を行う「産業協働型インターンシップⅠ」、「産業協働型インターンシップⅡ」の 4 科目 6 単位である（インターンシップが 1 科目 1 単位）。

授業の設計

本授業は平成 28 年度の実施に向け、前年度の 10 月から授業設計を開始した。授業を担当することになる教員で数回ミーティングを行い、大目標とそれに向けた小問の設定について話し合った。

大目標はまず、「学生が将来の選択肢の一つとして岐阜の企業に就職したいと思う」とこととされた。これは COC+事業が学生の地元就職率の向上を事業目標としているためである。職業選択を押し付けることになりかねないと危惧する声もあったが、自分の生き方を改めて考えた時の選択肢として、地元のことを見直すのは有意義であるということで合意した。

大目標確定後、そこに向けての小問の組み立てを行った。4 つの小問において、学生が気付き考えてほしい内容を整理し、その成果としてどこにゴールを置くのかを設計している。最終的には実際に岐阜県で働いている様々な人との交流会を企画させて、総まとめとすることとなった。

表 1. 授業計画

小問（割り当て回数）	内容
ガイダンス（1回）	産業リーダーコースの説明，授業の意識付け
大企業と中小企業／都市と田舎（2回）	自分の価値観を見直す。小問タイトルにある対比軸を改めて考えさせ、実態を知らせることにより、ステレオタイプに思い込んでいる自分に気付かせる。
世の中の変化を知る（2回）	周辺環境について考える。自分を取り巻いている世界が不変ではなく、常に流動的であることに気付かせる。
人の流動性を考える（3回）	自分の思い込み、世の中の流動性への気付きを踏まえて、そこで生きていく自分について、説明書を作成しながら改めて考える。
期待される能力とは（3回）	今後生きていくためにどういった能力が必要になるのかを考える。各自の思う必要な能力の整理としてルーブリックを作る。
交流会の企画実施（4回）	ゲスト候補者リストを渡し、自分の将来を考える上でだれに何を聞きたいかを整理させ、実際の交流会を企画実施させる。

いずれの小問においても、「①現状認識」、「②自分ならどうするかという問いかけ」、「③外部からの刺激」、「④事例を受けて感じたことを自分に落とし込む」という4段階を共通の構成として持つこととし、具体的な内容は各担当教員にゆだねられることとなった。

2. 授業の実施とラーニングポートフォリオの活用

授業の概要

平成28年度後期の受講生は登録が31名で、履修取り消しが1名。2年生2人を含み、最終的には28名に単位を認定した。小問ごとに担当教員の変わるオムニバス形式だが、初開講ということもあり極力担当回以外の様子も見学するようにしている。

また、学習成果についてより深く学生に自覚させるため、小問ごとにラーニングポートフォリオの執筆を学生に課した。内容は「この授業から何を学ぶことができたか」、「どのような状態で最も学ぶことができたか。また、それはなぜか」、「この授業を楽しむことができたか」、「この授業は、他の授業の学習やこれからの人生にどのようなつながりがあったか」などの項目を提示し、学生はそれを参考にしながら自分の書きやすい項目を適宜作成している。分量は2000字程度を要求し、大学の情報共有システムを活用して相互にコメントをつけるまでをノルマとした。

小問1「大企業と中小企業／都市と田舎」（加藤直樹・松林康博）

小問1でのゴールは講義全体での学習の動機づけを行いながら、大企業に行くことが良いという多くの学生が持つと想定される固定観念を打破し、自らの思考・決断に基づいた将来のキャリア設計を行うきっかけとすることであった。学習の動機づけのために、チームで作り上げることの楽しさを体感するアイスブレイクとして、マシュマロチャレンジを行った。学部、学年、性別が異なる混成のチームメンバーが意見を共有しやすい環境を構築した後、「大企業にどうして私たちは勤めたいのだろうか」というグループワークを行った。日ごろ漠然と考えていることを他者と共有し、グループワークを通じて多様な視点が存在することを知り、他者の視点も取り入れ俯瞰的に課題を検討する設計とした。そのうえで、ゲストスピーカーとして、大都市で働き、現在郡上にIターンをした「ふるさと郡上会」の小林謙一氏を招いた。大都市で働いた経験と比較検討し、地方で働くことを選択した経緯を話していただくことで、学生が抱いていた固定観念について、改めて問い直す機会と地方で働くという新たな人生の選択肢を提示し、学生自身が問いを深め、学習を進める設計とした。

小問1完了時に学生が提出したラーニングポートフォリオでは、「私は、2回の授業を通して、自分にとって幸せな生き方はなんだろう、と自らに問うようになった」、「インターシップ、ボランティア、社会活動演習（地域科学部の活動のひとつ）などの原動力になった」、といった学習の動機づけになったというコメントや「先生の話聞き自分の意見を持った

後にグループのメンバーと意見を交わすことによって、自分だけの視点だけでなく多くの視点から考察することができたのがよかった」といったグループワークの意義に関するコメント、「私は固定観念や思い込みに縛られていることに気づきました。この講義を受ける前は、たいした理由はないのに『就職するなら大企業』や『田舎より都会』と考えていた」と固定観念を打破するコメントがみられ、当初の設計をある程度機能させることができた。

一方、課題として、ラーニングポートフォリオの「学べなかったことは何か」という項目に対して、「学べなかったことはない」というコメントが多くみられ、学生が主体的に目標設定を行う設計が不足しており、学習行動に改善の余地がある。今後は講義全体のアウトラインを提示し、学生が次の講義の問いについて予習を積極的に行う環境を整備することで、学生からの能動的な学習態度を引き出す設計とする。

表 2. 小問 1 における共通構成要素の内容

①	現状認識	「大企業にどうして私たちは勤めたいのだろうか」というグループワークを通じて、自分の考え方が視点の一つでしかないを知る。
②	自分ならどうするかという問いかけ	ゲストスピーカーへの質問項目を検討する中で、自らの行動について問いかけする。
③	外部からの刺激	郡上で生活する I ターン者の経験談を聞く。
④	事例を受けて感じたことを自分に落とし込む	その後ラーニングポートフォリオに学んだこと等を記載する。

小問 2 「世の中の変化を知る」(大宮康一)

小問 2 「世の中の変化を知る」では、「英語」、「グローバル化」、「国際化」、「留学」をキーワードに、日本語以外の言語や海外に目を向け、地域や日本を取り巻く世の中の変化を知り、自身自身の将来やキャリア設計を考えるうえで重要であることを目標とした講義であった。現在の大学生は、インターネットの普及により容易に海外の情報が収集でき、実際に諸外国を訪れるまでもないと考えている傾向にある。しかしながら、情報が容易に手に入ることで、実際に海外を訪れることや、実体験にもとづき国際的な視点を持って、世界の変化を知り、考えることは別である。

そこで、1 回目の講義では、「英語」をキーワードに、言語という視点から世界を見て、学生自身の将来にとって、今後どの程度、英語が必要となるかを問うてみた。全世界には、言語が 6000 とも 8000 とも言われている中で、これまで多くの時間を学習に費やした英語が、果たしてどの程度必要とされる道具であるかどうかを、グループワークを通じて、学生が改めて考える場となった。

2 回目の講義は、日頃、あまり厳密に定義を考えることのない「グローバル化」や「国際

化」という言葉が学生自身の身近なことからどのようなイメージされるかについて議論し、海外経験の必要性について、学生達はグループワークを通じて考えた。グローバルが意味するところは、実は生活のあらゆるところにあり、普段は見過ごしている物事を改めて見つめなおすことで社会の変化を考える機会となった。

この「世の中の変化を知る」の2回の講義で、学生からは、次のような学びや感想があった。

「英語は必要か」という問いに対しては、必要であるとする意見と不必要であるとする意見の両方が出たことにより、双方の視点から英語に対する考えを深めることができた。特に、将来の職業や進路にもとづいた意見が多くだされた。例えば、研究で論文を読み書きするために英語が必要、エンジニアを目指すからには英語が必要、公務員でも今後外国人居住者が増えるため英語が必要であるなどの意見があった。一方で、日常生活で英語を使う場面がほとんどないため、英語は必要ないとする意見も一定数見られた。

「将来、海外経験は必要か」という問いに対しても、日本では得られない多様な経験をとおして自身の活動の幅を広げるために必要あると言った意見、日本で過ごすことしか考えず海外とのつながりを必要としないとする意見もあり、グループワークを通して学生たちは、他の学生の多様な考えや価値観に触れながら、議論を深めることができた。

全体を通して、学生からは「自分の周りの変化を正確にとらえ、その変化に自分がどうか関わっていくのか、順応していくのかについて考えた」などの感想もあり、多様な視点から世界や社会を見つめることも、自身のキャリア設計において必要であり、大切であることを学ぶ機会となった。

一方で、留学経験者の生の体験談をもっと聞きたかったとする感想もあり、学生が今回のテーマに対して、容易に自身のこととしてイメージし、グループワークを円滑に進められるような情報提供の方法について改善が必要であることを確認した。

講義の進め方については、1回目と2回目でグループワークのメンバーを変え、かつ2回目では3人程度の少人数にしたことで、学生からは、普段話さない人と話し合いする機会は楽しく有意義であったという感想や、少人数であることで発言の機会も多く、議論を深めることなどの声も多くあった。このことから、普段とは違うメンバーとのグループワークは、学生にとって有効で多様な意見を聞ける機会であり、学びを促進する効果があることも確認することができた。

これまで、地域の方々など多方面の人たちと、若者が地域で活躍することについて意見交換する機会が多くあったが、地域に貢献するためには生まれ育った地域を一度出て、海外も含めて外で学び、経験したことをいずれ地域にも持って帰り、役立ててほしいとの多くの声を耳にした。学生には、彼らが生まれ育った地域、もしくは卒業後、生活し活動する地域に貢献できる人材になってもらいたいと願う一方で、海外に関心を持ち、国際的な視野を養い、積極的に海外を訪れ経験することも、学生自身の将来における選択肢の1つになることを願う。今回受講した学生にとって、遠いようで身近にある英語や外国のテーマに触れたこと

で自身のキャリア設計に少しでも役に立つことを期待している。

小問3「人の流動性を考える」(塚本明日香・益川浩一)

小問3でのゴール設定は「自分の取扱説明書を書く」である。どういった説明書を作らせるのかを考えるにあたっては、主にティム・クラーク『ビジネスモデル YOU』(参考文献1)を参照した。これは現在の仕事に悩む人が自己分析を行うための参考書であり、自分がいま何を持っていて、何をしたいと考えており、どのような方向性で考えるべきか、ということが様々な事例紹介とともにまとめられている。既に職業についている人が使うためのものであるため、学生に当てはめるには不適切な項目もあり、大筋は参照したものの項目名は大幅に変更して取扱説明書を作成した。特に大きな工夫となったのは、まだ経験の多くない学生に現状分析をさせるために考えるヒントとして「喜怒哀楽」の項目を盛り込んだ点である。

「①現状認識」はそのま
まワークシート左上「あなた
が今持っているもの」の
整理が該当する。もとより
自分自身が認識対象となる
ため、「②自分ならどうする
かという問いかけ」もここ
に含まれる。次にワークシ
ート右上「あなたが欲しい
もの」を考えるにあたって、
他人が何を大事にしている
のかを「③外部からの刺激」

あなたに関する説明書		どう聞きたい?		誰あるいは何の役に立ちたい?	
あなたならではの取組みは?	どんな協力者がいますか?	つな ぎ か た つ 持 っ て い る も の と 欲 し い も の の		あなたにどんな財産がある?	何を手に入れたい?
あなたが今持っているもの				あなたが欲しいもの	
考えるヒント(どんな時にどう感じますか?)					
喜	怒	哀	楽	追加項目:	

図1. ワークシート(自分の取扱説明書(見本))

として提示した。自分が尊敬する人について考えさせること、ソーシャル・ビジネスの2事例をプリントで配布したこと、「喜怒哀楽」の感情発現についてグループワークを実施したことがこの段階である。自己省察を極力重視したい小問のため、外部刺激と言いつつも情報提供の時間はあまり取らない形をとっている。最後に「④事例を受けて感じたことを自分に落とし込む」ための作業として、自分の強み・弱みと生き方の方針について考えさせ、それをワークシート上部中央「持っているものと欲しいものをつなぎ方」としてまとめさせた。

小問3のラーニングポートフォリオでは、改めての自己分析が新鮮だったという指摘や、同じ事柄を人によって長所と捉えたり短所と捉えたりといった差が興味深かったというコメントが多くに共通していた。グループワークの時間を多く確保したことが一定程度功を奏しており「いろいろな関連事項についてじっくり考えることができた」、「今回学んだことの多くは他人と自分の情報をたくさん交換し合ったから学べた」という肯定的な意見も散見される。「喜怒哀楽」の項目も上手く作用しており、そこを考えるワークが特に楽しかった、という意見も複数見られた。

一方で「自分の性格をさらけ出すという行為は、自分にとって苦行でした。しかし、授業を通じて自分に関する理解が深まり、これからの人生をよりよく過ごすためのヒントが得られました」という意見や、「もう少し正直に(?)自分と向き合えたら良かった」という反省点が挙げられており、自己省察を授業として実施するときの目的設定の重要性が改めて確認された。特に「自分が今持っているもの」を整理している時、直接「これは何のための作業ですか」と質問を投げかける学生もおり、重ねての説明で納得したのかよく取り組んでくれたが、かなりの自己開示を要求する小問の性質上、こちらの意図の説明にもはっきり言葉を尽くす必要があることが実感された。つい「取扱説明書」を作成するための手順として説明しがちだったが、それ自体が何のための作業かということ意識させなければならず、最後に「カーナビのようなもので、現在地と目的地があって初めて行き方を考えられる」として小問の総括をしたことでようやく腑に落ちた学生もいたようである。この点は次回以降も重々意識していきたい。

小問4「期待される能力とは」(廣内大輔・今永典秀)

小問4でのゴールは「岐阜県の企業で働くことをイメージしながら、現状の自分の姿を理解し、将来に向けた目標とアクションプランを考えること」であった。講義は、岐阜県内の企業128社が掲載された『岐阜県就職情報誌マイプラン2017年版』(一般社団法人岐阜県経営者協会発行 参考文献2)を活用し、岐阜県内の企業を理解するとともに、企業で働くことをより具体的に考えるために、「職種」に関する理解を深めた。その上で、企業における勤務経験を有する教員2名(廣内・今永)のライフヒストリーを「Life Line Sheet」を参考にしながら話をした。

小問4を担当する廣内と今永はストレートにアカデミズムの道へと進んでいない。2名とも大学(学部)を卒業後は民間企業に数年間勤め、その後大学院に進んでいる。また、大学教員となる前には複数の企業等で勤務したことがあり、かつ故郷と故郷以外のいずれの地でも働いた経験を持っている。こうした経歴上の特色を活かした授業とするよう努めた。

担当教員のライフヒストリーを話す回では、廣内と今永がそれぞれ30分程度、自身の人生を振り返るスライドを準備して、受講生にとっては彼らの保護者よりやや若い人生の先輩としての立場から、出身地で暮らすこととそこを離れることで見えてくることや、ジョブチェンジやキャリアチェンジで得られることについて講義した。

多くの学生が「転職は悪である」といった固定観念を有しているとの仮説に基づき、「転職が必ずしも悪いことではない」と考える機会を提供することを意識して構成した。学生にとっては、固定観念を払拭した上で、外部からの刺激を通して、自身の過去の経験を省察することを狙いとした。受講学生は、教員2名の話聞いた後、「Life Line Sheet」と「将来の目標シート」を記載した上で、学生同士でそれらを共有した。その後、ラーニングポートフォリオによって学びの成果を定着させた。

ラーニングポートフォリオを用いた学修成果の分析

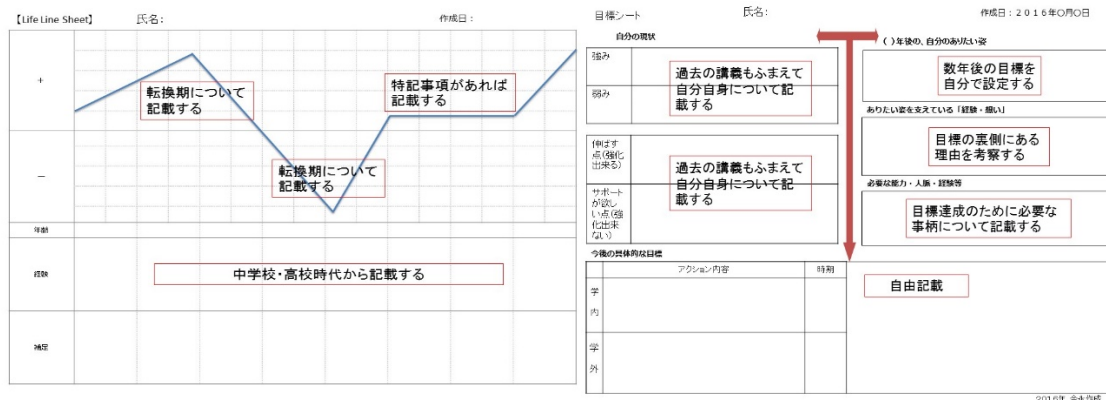


図 2. Life Line Sheet

図 3. 目標シート

表 3. 小問 4 における共通構成要素の内容

①	現状認識	Life Line Sheet の記載により自分の現状を過去の経験から考察する
②	自分ならどうするかという問いかけ	目標シートを通して今後のあるべき姿（目標）とその目標に対するアクションプランを記載する
③	外部からの刺激	教員 2 人により Life Line Sheet を活用した体験談
④	事例を受けて感じたことを自分に落とし込む	2 種類のシートを作成しペアで発表し合う。その後ラーニングポートフォリオに学んだこと等を記載する

小問 4 のラーニングポートフォリオでは、「転職の固定観念が覆された」、「転職も悪くないかもしれない」といった転職のイメージが変わったことに関する振り返りのコメントや、「自分の未来の設計の手助けになった」といったような過去を振り返り目標設定に対するコメントも多くみられた。一方で、シートの共有はペアワークに限定されたことから、「いろんな人と意見交換したい」、「シートの共有にもっと時間を費やしてほしい」という学生からの意見もあり、時間配分に関しては次回以降の検討すべき課題である。

また、教員 2 名のライフストーリーについて、その内容がこれまでのキャリアを通史的に述べるに留まっていたことを反省している。次年度からは、転居や転職をすることで、地域の見え方がどのように変化したのかという視点をもっと盛り込むことで、本授業の地域志向性を強化すべきと考えている。

交流会について

講義のまとめに位置づく交流会は、授業計画当初は「誰を呼ぶか」というところから学生に企画をさせる予定であった。しかし、グループ内で一人ゲストを決めて呼ぶよりも、学生それぞれが話を聞きたい人を選ぶ方が授業の趣旨に合致すると考えられ、あらかじめ教員側でゲストを手配する方針に変更した。本講義のまとめとして、グループでの合意形成や企

画力よりも、個々に何を考えるかを重視したいとした結果である。

招いたゲストは製造業、金融業、福祉系ベンチャー企業、岐阜県経営者協会、NPO、自治体職員の6種8名である。35分ずつ2回の交流会を実施することとし、学生には第三希望まで提出させた。事前学習はそれまでのグループを離れ、同じタイミングで話を聞く仲間で質問内容を整理させている。

学生の希望は比較的バランスよくばらけたため、全ての学生が第一希望と第二希望の相手と話をすることができた。また、ゲストの方でも学生の用意した質問に応じて頂くだけでなく、問いかけも盛んにして頂くことで活発な議論が行われた。グループによっては働き方に限らず、本講義の本旨である自己省察についてじっくりと語らったところもあり、授業の学びについてゲストから改めて気づかされたことは学生にとって大きな刺激となったようである。

交流会のラーニングポートフォリオは授業全体の振り返りとして記述させた。「大学時代にやっておくべきことは何かということを実際に働いている方から聞くことを目的とした」、「どういった技術が企業では求められるのかについて教えて頂いた」、「実際に何をしているのか、資金はどこから出ているのか、気になったことを質問させて頂いた」というように具体的な活動に結びつけた交流やそれを通じた感想の他、「お話を聞いて、線引きを自分でしてはいけないと思った」、「自分も入社当初は悔しいこともあって見返してやろうと思って頑張ったという話を聞き私も失敗を恐れず色々なことに挑戦しようと思った」、「生まれた時から振り返ることは、そうと意識はしていなかったが既にやっていたことに気付かされた」等、ゲストのコメントを受けて自分の振り返りをしたり、改めて自分の学習内容を意識したりしたことも伺える記述が多く確認できた。

この小問では「①現状認識」、「②自分ならどうするかという問いかけ」についてはそこまでの講義でほぼ確認を終えており、実際に何を質問するかを考えたことが②に該当する程度だが、「③外部からの刺激」としての交流会、「④事例を受けて感じたことを自分に落とし込む」ためのラーニングポートフォリオの記述は相当に充実したものであったと言える。

3. 担当教員等による振り返り

概要

平成29年3月14日、担当教員のうち5名（加藤・廣内・今永・松林・塚本）と、岐阜県経営者協会の澤村氏による講義の振り返りを実施した。教員以外に澤村氏を招いたのは、大学が学生にどのような力を身に付けさせようとしているのか企業側にも理解して欲しい、また、企業側が学生に何を求めているのかを教えて欲しいという2つの企図による。

材料としたのは受講生が最後に提出したラーニングポートフォリオである。受講生がどのように力を身につけたのかを確認するため、どんな能力がこういった場面で身につくのか、産業リーダーコースで重視する5つの力（注）について最初に作業仮説を設定して分析

することとした。

表 4. 作業仮説

身につける能力	身につけるための実際の活動・学習内容
俯瞰力（特に他者との対比として）	グループワークでの共有・対話
共同推進力	グループワーク全体
駆動力	目標を自分で書き出す
課題解決力	自己理解
地域志向力	地域で活躍する人の声を聴く

作業としてはまず上記の仮説を意識しつつ、分担してラーニングポートフォリオを読み、望ましい学びを得ていると思われる記述を抜き出した。その記述を全員で共有し、どういった学修を表すのかを分析、身につける能力として掲げた力が実際にどういった内実を持っているのかを考察・共有することとした。

分析結果

表 5. 分析結果

身につける能力	「自己省察と将来のキャリア設計」でどのように身に付いたか
俯瞰力	構造化してみることができる。 (他者と話すことで自分を相対化し、客観視の視点を持つ)
共同推進力	共感・他者理解・自己理解 (※負荷のかかる共同作業はあまり実施していないため共感や相互理解が主体)
駆動力	一歩踏み出す手前の動機づけ、目的意識醸成の段階
課題解決力	自己意識の洗い出しによる目標設定からの課題発見 ※何か課題解決に向けた作業をした訳ではない。発見から解決というプロセスを自己理解に置き換えている。
地域志向力	身近な人・地元の人からの刺激を通じた関心の醸成（仕込み段階）

地域志向力は、それを明確に意識しているコメントは拾い出せなかったが、外部講師や交流会の対話者として招いたのは全て岐阜県内の方々であり、いずれ芽吹けば良いという種まきの段階である。

他の 4 つの能力は、ある意味当然のことながら相互に連動して学ばれていた。グループワークを通じて共同推進力が育まれ、その対話を通じて自己の客観視が可能になる（俯瞰力）。客観視することで課題が明らかに意識され（課題解決力）、またその改善に向けた意識

づけが行われる（駆動力）。低学年対象ということもあり、具体的に将来についての目標設定というよりは今後の学生生活で気を付けていきたい事、という位置付けの記述が多くあった。

授業を通じて多用したグループワークは、かなり有効に機能したようである。「グループ内で意見を交わし合うという状況で最も学ぶことができた」という記述を筆頭に、グループワークが良い考える機会になったという記述は全てのラーニングポートフォリオで確認できた。あるいは「見ず知らずの他人といかにコミュニケーションをとるか、その方法を学びたかった」と記述する学生もおり、初めからグループワークを通じたコミュニケーション能力習得を期待していたことがうかがえる。この学生は「積極性と役割分担が他人とのコミュニケーションを円滑にする」ことに気付いたと述べている。グループで一つの話題について話し合うという場の構造をうまく捉えた記述である。

また、自分自身についても、グループワークや交流会での対話から「原点から線を引いて将来を考えたい」というように、自分自身を構造化してみる、と言えるような記述もしばしば確認できた。特に交流会において社会人の方から「生まれた時からのライフラインシートを書いてごらん」と言われたグループがあり、そのメンバーの記述に多く見られた。自己省察について、授業の内容と外部からの刺激が上手く連動して学習を促したと考えられる。

そして、短期的な気づきに限らず、自身の成長についてより深く意識した例もある。やや長い引用になるが「(ラーニングポートフォリオを) 読み返して感じることは、「自分は結局口だけである」ということ。(中略) その当時は思っていたことでも時間が経つと忘れてしまう。(中略) 生半可な気持ちで人は変わらないし、何の犠牲もなしに変わることもできない。自分は本当はそんなに変わりたいと思ってないのだと悟った。もしかしたらこの学びは先生方の意図していた学びとは違うかもしれないが、まぎれもなく自分が学んだと思えることであり、とても大切なことだと思う」という記述は、課題をこなすために記したことが自分にとってどういう意味があるのか、という点を掘り下げ、実態を言語化した点でさらに一歩踏み込んだ内容といえる。

最後に、ラーニングポートフォリオを分担して読むところから一緒に取り組んでいた岐阜県経営者協会の澤村氏に、話し合った結果について「企業で求められている能力を鑑みたときにどう思われますか？」と問いかけた。いずれの能力ももちろん働く時に有効であり、求められているものであるとの返答と同時に、とりわけ「なぜそうするのか理由を明らかに意識すること」については「管理職研修等でも実施するような内容。これができる人は強い」とのことであった。

4. まとめ

全ての小間で実施し、また全体を通じて講師側で意識した4段階（「①現状認識」「②自分ならどうするかという問いかけ」「③外部からの刺激」「④事例を受けて感じたことを自分に落とし込む」）は、自己省察にあたって自分の行動の底にある真因を探らせるための流れで

ある（右図）。

考えたことの記録として、ラーニングポートフォリオは非常に有効に機能した。最後のラーニングポートフォリオ（講義全体の振り返り）を書くために読み返した学生も多く、学びを深める一助となったのは事実である。

今回の場合は、同じ話を聞いても人は違う見方をすることに驚いた、と

というような見方の違いに気づいた記述が散見された。見方は近いが表に現れた行動が異なるケースもあって良いのだが今回のラーニングポートフォリオの中には表れておらず、お互いの考え方をじっくり話し合えたのが、初年度ながら今回の受講生の特徴と言えるのかもしれない。

今回の実践は、大目標である「学生が将来の選択肢の一つとして岐阜の企業に就職したいと思う」に向けて、将来の選択肢をいかに考えていくかという面では十分な成果があったと言えよう。外部刺激を岐阜で働く人に絞って協力いただいたことで「岐阜の企業に就職したいと思う」種も播かれた。一方でオムニバス形式のため、小問ごとに記述させたもののそれを受けた担当教員からフィードバックをする機会がなく、これは次年度以降の課題となる。

【注】

5つの力...産業リーダーコースはCOC+事業の一環で設計したコースであり、すなわち参加大学と共通の枠組みを適応している。岐阜大学でも既に基盤的能力として3つの力と9つの要素を設定しているが、ここでは参加大学共通の枠組みとして設定した産業界ニーズに応えるための5つの能力（俯瞰力・共同推進力・駆動力・課題解決力・地域志向力）をベースに分析することとした。

【参考文献】

- 1) ティム・クラーク著 アレックス・オスターワルダー&イヴ・ピニュール共著 神田昌典訳（2012年）『ビジネスモデル YOU』 翔泳社。
- 2) 一般社団法人岐阜県経営者協会発行（2016年）『岐阜県就職情報誌マイプラン 2017年版』。

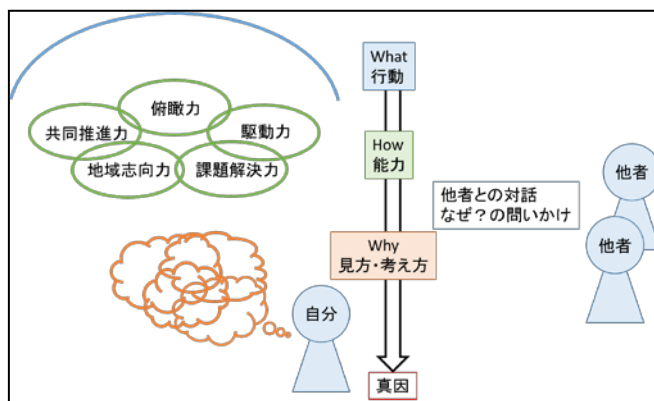


図 4. 振り返り時の板書